

インターネット型大学院におけるオンラインオリエンテーションの比較検討 —学習者の立場から—

Comparative study of online orientations of an Internet-based graduate school -From a learner's perspective-

吉田 明恵^{*1}, 根本 淳子^{*1}, 北村 士朗^{*1}, 喜多 敏博^{*1}, 鈴木 克明^{*1}
Akie YOSHIDA^{*1}, Junko NEMOTO^{*1}, Shirou KITAMURA^{*1}, Toshihiro KITA^{*1}, Katsuaki SUZUKI^{*1}

^{*1} 熊本大学大学院 教授システム学専攻

^{*1} Graduate School of Instructional System, Kumamoto University

Email: ayoshida@st.gsis.kumamoto-u.ac.jp

あまし: 本発表では, 学習者の立場からインターネット型大学院のオリエンテーション科目の変化を比較検討について報告する. 二年度を比較した結果, 科目開始方法, 体験学習の拡充, および学習ポートフォリオの扱い方に違いが見られた. 設計者の意図, 学習への影響, 今後の方向性について述べた.
キーワード: オリエンテーション, ストーリー型カリキュラム, インターネット型大学院

1. 研究の目的と方法

本研究は, インターネット型大学院におけるオンラインオリエンテーションの内容と方法を検討し, 次年度に向けての改善提案をまとめることを目的としたものである. 学習者として, 初めてインターネット型大学院に在籍した経験を振り返り, 何に對し不安であったか, 何によって意欲が掻き立てられたかを省察することで, 新入学生が更に学びやすい環境を得られるよう, 役立ちたいと考えている.

本発表では, 学習者として体験した熊本大学大学院教授システム学専攻における 2008 年度オリエンテーション科目教材と同科目 2009 年度版を点検した結果を報告する. まず両科目について, 構成・内容・文章等の実際の変化をまとめた. それを基に科目作成者に変更・改善の意図をインタビューした. それらを踏まえて, 学習者として両年度の比較分析を行った.

2. 科目の変更点とその影響

2.1 オリエンテーション科目の全体像

2008 年度と 2009 年度での科目構成の変化を図 1 に示す. 大きな違いは, 科目開始方法, ストーリー型カリキュラム (SCC) についての体験学習の拡充, および学習ポートフォリオの扱い方に見られた.

2008年		2009年	
1B	第1回入学にあたっての心構え	第1回入学にあたっての心構え	1B
	第2回ストーリー型カリキュラムとは? そしてなぜ?	第2回システム環境設定	2B
2B	第3回システム環境設定	第3回ゴールステートメントを書こう	3B
	第4回3種類の学習環境	第4回リフレクションペーパーの作成	
3B	第5回ゴールステートメントを書こう	第5回自己紹介ページの作成 - 基盤的情報処理論修了を目指して -	4B
	第6回リフレクションペーパーの作成	第6回SCCとは何? そしてなぜ?	
	第7回自己紹介ページの作成 - 基盤的情報処理論修了を目指して -	第7回SCCの世界へ? - 究極の選択へ -	
	第8回終了宣言	【MTM課題】	

注: 1B-4BのBはブロックを表す

図1 オリエンテーション科目の構成

2.2 科目開始時の自己紹介

2008 年の 1 ブロックの目標は, SCC に関してとポートフォリオに関する 2 点であったが, 2009 年度の目標は「この科目の内容を確認し, これから一緒に学んでいく仲間を知りましょう。」という一つの目標に変更された. オリエン科目内容を把握してなくても誰もが明確に理解できる目標であった. その結果の表れか, 自己紹介タスクでは, 2008 年度の投稿数 26 件 (受講者 19 名) に対し, 2009 年度は 179 件 (受講者 18 名) に増えた.

2009 年度の自己紹介ディスカッションボードへの投稿数は図 2 に示す通りである. 受講者には, 経験者である過年度科目等履修生が, それぞれ 3 名と 7 名含まれていた. 2009 年度は, 学生が自己紹介をすると早い段階で, 科目等履修生だった学生 a と e が, 相互コメントを積極的に書き込んでおり, 自己紹介の場を盛り上げていたと考えられる.

教材作成者へのインタビューによれば, 投稿数の差は, 目標設定の影響というよりも, 科目履修生 2 名の存在がチューターの役割を果たしていたためだと分析している. 来年度は, 更に書き込みへの抵抗感を減らすべく, 説明を増やすことも予定している.

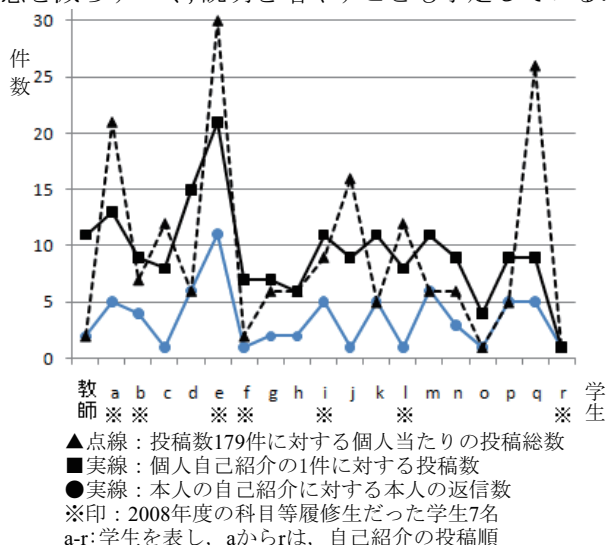


図2 自己紹介掲示板への投稿数 (2009年度)

学習者として、自己紹介への書き込み段階では、まだ見ぬ同級生に対して自分を表現することに不安感を持った記憶がある。自己紹介での投稿数増加には驚かされたものの、2008年度入学の学生は非常に仲が良く、現段階で学習上の協力関係もできており、初期段階での自己紹介の投稿数だけがその後の人間関係に影響があるとは感じていない。しかし、本専攻では提出物の大半が他の学生にも公開されるので、早いうちからこの学習環境に慣れ、自己開示への抵抗感をなくすためにも、科目の初期段階での学生間交流は非常に大切だと感じる。良好な人間関係なくして、建設的批判をし合うことは難しいと感じる。

2.3 ストーリー型カリキュラムの体験学習

教材構成の変更点として、2008年度では1ブロック第2回で学習していたSCCに関する内容が、2009年度では4ブロック第6回での学習となっていた。また、2009年度は第7回で新たに体験学習として、SCCにおいて4月からバーチャル社員として勤務するMTM社のストーリーを事前に知ることができるようになっていた。タスクとして、MTM社の中に設置されている喫茶室(掲示板)への訪問が課せられている。2008年度も喫茶室はあったが、事前訪問課題はなく、回答担当者は教員と研究員であった。2009年度は、2008年度入学の学生3名がMTM社先輩社員として、掲示板での回答者として参加している。これらは、2008年度の4月に0週目で取り組んだ内容を繰り上げたものである。オプションとして、SCCカリキュラム履修を選択した学生に対し、MTM課題として、上司となる中村部長への挨拶メールが課せられている。

教材作成者としては、本来はSCCの全体像を1ブロックで公開したかったが、教材準備が時間的に間に合わなかったため後に回したという事情があった。しかし、SCCを4ブロックに回し、SCC教材の公開時期を遅らせることで、2008年度の学生の不満や不安点を教材改善に反映させることができた。結果として学生にとって、科目教材の公開は昨年より1週間早くなり、ゆったりと自己紹介やeラーニングの学習方法を学び、しっかり準備されたSCCの体験学習で、深く学ぶことが可能となった。

学習者として、4月の学期開始時に突然「あなたは今日からMTM社の社員として…」と仮想上司である中村部長からメールがあり、非常に戸惑った記憶がある。2008年度では4月の入学後にしか把握できなかったSCCの学習内容を、入学前に体験する(社内喫茶室訪問・中村部長への挨拶を含む)ことで、2009年度は入学後に不安のない状態でスムーズに学習を開始する環境が整えられていたと感じる。

2.4 学習ポートフォリオの利用と位置づけ

2008年度は、学習ポートフォリオへの提出物のアップロードを、科目の課題ごとに課していた。2009年度はポートフォリオシステムが更新中で使用できなかったため、上記の指示はない。しかし、2009年度では、最終修了試験にはポートフォリオの活用が重要というニュアンスの文が記載されていた。2008年度は、ポートフォリオと最終修了試験との関わりには触れられていなかった。

「3) ポートフォリオと最終試験

本専攻では学位取得時に最終試験を受験することが終了条件となっています。今期以降はポートフォリオを活用して実施します。」

教材作成者インタビューでは、学習ポートフォリオの新機能の実装が間に合わず、現在利用できない状況だが今後は相互フィードバックをする仕組みを取り入れるなど、学習ポートフォリオの活用環境を整備していく予定であることが分かった。

2008年度は、課題の提出ごとにポートフォリオへアップロードと提出物公開が義務づけられており、公開されたことの影響か、課題への相互コメントは積極的であったと感じる。たとえば、リフレクションペーパー課題への相互コメントの投稿数は、2008年度は180件であったが2009年度は82件に減少している。入学以降、継続したポートフォリオの利用は習慣づいているとは言えないが、他の学生の成果物を閲覧できる環境は、個々への刺激にもつながり、学習意欲を維持させる一つの方法となると感じる。

3. まとめ：2010年度に向けて

本報告では、教材の分析と作成者へのインタビューを通して得られた結果を学習者体験を振り返ってまとめた。その過程で、良いeラーニング教材は一人の力だけでは出来上がらず、協同作業であるということを実感した。また、学習者と教材が1対1で向かい合うだけで効果が生まれるのではなく、他者の提出物から学ぶことや、建設的批判をし合う双方向性が重要であると再認識した。eラーニングでは「いつでもどこでも独学で」ではなく、「いつでもどこでもみんなと議論」を実現できる環境を提供することが期待されているのではないかと。

今回の検討で、同じ社会人大学院生であっても、2008年度と2009年度の入学生にはそれぞれ集団としての特色があり、学生の中にチューターの役割を担う者がいるかどうか等を見極め、教員側は支援を変更する必要があることも分かった。また、2008年度はSCCの体験学習がなかったが、2009年度の教材を利用し、入学前に体験学習ができることで入学後の不安を減らすことが可能であると感じた。

海外のオンライン大学(特にアメリカ)では、事前にWeb上で学習教材のシステムに触れさせるデモ版を公開している所が多いように感じる。入学後にシステムへの不慣れ等で本来の専門学習に支障をきたすことを防ぐ意味でも、入学前の体験学習は非常に効果があると思われる。今後は、学習者の視点で改善点を意識しながら国内外のオンライン大学の情報を収集し、その結果を2010年度のオリエンテーション科目教材改善提案に生かしていきたい。

参考文献

- (1) 根本淳子・宮崎誠・松葉龍一・鈴木克明：“オンライン学習者のためのオンライン・オリエンテーション-SCCに向けての改善-”，教育システム情報学会第33回全国大会講演論文集，62-63 (2008)
- (2) 根本淳子・北村士朗・鈴木克明：“eラーニング専門家養成のためのeラーニング環境の設計”，教育システム情報学会研究報告21(1)，33-40 (2006)